



弁護士 田中 秀雄

●2年目の親子鷹

息子との共同の仕事も2年目を迎えた。息子は急成長している。法律相談と一緒にやるので、よく分かる。昨年はおどおどしながら話していたので、こっちまで緊張したが、2年目になると自信を持って答えている。息子の成長は私の指導の成果ではない。他の事務所の先輩に声を掛けられて一緒に仕事をし、弁護士会の委員会活動で知り合った弁護士もいる。また「明日の自由を守る若手弁護士の会（通称「あすわか」）」に参加して劇に出演したり神戸駅前での街頭宣伝のスピーチまで行った。こういった若手弁護士から受ける影響が彼を一回り成長させたのだらうと思っている。息子が主任で、私がサブとなる事件も増えてきたし、また姫路と大阪で裁判が重なったときは、息子が大阪に行き、私が姫路に行くなど役割分担をするようにしている。今、民事裁判では書類の提出期限が次期期日の1週間ぐらい前と裁判官から指示されることが多いが、時々約束を守らない弁護士がいる。そんな時私は裁判官の前で相手方弁護士を厳しく糾弾することが多いが、息子は概ね寛大である。依頼者に対する電話の口調も私より遙かに優しい。高校卒業後東京に行ってしまったので、電話対応などは私や妻が教えたものではない。もしかすると私より息子の方が人間が出来ているのかなとも思う。私の方がずぶといところがあり、息子は多少線の細いところがあって、そこは気になるが、いずれ経験で克服してくれるであろう。

●集団的自衛権と解釈改憲

安倍首相の暴走が止まらない。安倍首相が得意げにボードで説明した集団的自衛権行使の必要な例はすべて個別的自衛権で解決できるもので、あの例は、国民へのまやかしかであることが明らかになっている。憲法を解釈で変えてしまうようなことはあってはならない。公明党も解釈改憲の閣議決定に賛成してしまった。安倍首相はまるでどこかの国の大統領か北朝鮮の金正恩にでもなったかのように振る舞っている。自民党の中に首相の暴走を止めよう

とする者はいない。大手マスコミは、2020年の東京五輪までの長期政権だと持ち上げている。景気も外交もまったく評価するところはないのに、なぜこうなるのか。間違いなく安倍首相は祖父の岸信介の果たせなかった改憲と戦争への道を歩もうとしている。何とかならないものかとただただやきもきしている。

●離婚事件この頃

「絆」のスタート時、担当していた離婚事件は5件であったが、現在では約20件と4倍になっている。HPの相談から受任した事件も多いが、私の以前の依頼者からの紹介事件も多い。離婚事件は苦手だといって一切受任しない弁護士もいるが、私は離婚事件は嫌いではない。むしろ好きな方だ。一度ボタンの掛け違った夫婦の修復は困難である。当人同士だと纏まらない話も弁護士が入ると纏まることがあるので、ダメなら放置せず弁護士に依頼しても解決の方がよいと思っている。この頃は子どもと親の面会交流が大きな争点となることが多い。男性でも面会交流を強く求める方が増えてきており、その事自体は良いことだが、実際はそう簡単ではない。相手方とは会いたくないが子どもには会いたいと言われても、子どもが小さい場合、どのような方法で面会を実施したらよいか正解はない。試行錯誤の繰り返しである。

●交通事故事件この頃

「絆」のスタート時2件であった交通事故事件は、現在は約15件と7倍になっている。交通事故事件は受任から解決まで時間がかかる。頸椎捻挫・腰椎捻挫のムチウチの事案が多いが、ムチウチについては被害者と保険会社の考え方の差が大きい。被害者は事故に遭った以上完全に元の体に直すのが当然と思っているのに対し、保険会社は3ヶ月から6ヶ月で直るのが当たり前と思っており、長くて6ヶ月経ったら治療費の支払いをストップしてくることが多い。私は、治療は患者の権利であるから、合理的な期間である限り、治療を続けたらよいと思っている。ただし、自分の健康保険を利用せざるを得ない。保険会社の担当者から電話で頻繁に打ち切るように言ってくるので、依頼者の防波堤になり治療打ち切りを阻止している。ただそれだけ頑張っても1年ぐらい治療を続けても、自賠責の後遺症が、一番低い後遺症の等級の14級にも非該当として認められないケースが最近増えていることは悩ましいことである。

結縁、導縁、従縁

弁護士 田中 秀雄

「結縁、導縁、従縁」は私の好きな言葉である。何かのときに知って、私もこの言葉が好きになった。出典は知らない。「縁に結ばれ、縁に導かれ、縁に従う」というのは、おそらく「一期一会」と同じような意味なのであろう。

この広い世界でたまたま出会ったカミさんは、きっと縁で結ばれ縁に導かれてのことなのであろうから、ゆめゆめカミさんを疎かにしてはならない。

また我が事務所を選んで依頼者となってくれた方々も、きっと縁に結ばれ縁に導かれてのことであろうから、私が引き受けた事件に全力を傾注するのは当然のことである。私が40年も弁護士を続けてこられたのも私を信用してくれて自分や知り合いに何かあると私に事件を依頼して支えてくれた依頼者の方々のお陰であり、「絆」と

して独立しても何とかやっていけているのもこうした依頼者の方々のお陰である。私には20年、30年と長く付き合い続けさせていただいている依頼者が多い。私の依頼者で一番古い方は私が弁護士になって5年目くらいの時から35年くらいの付き合いであり、今は家族ぐるみの付き合いとなっている。

小学5年生の頃からジャイアンツファンであるのも縁であろうから、これからも縁に従ってジャイアンツを応援し続ける以外ない。

これからどんな出会いがあるかわからないが、これからも「縁」や「絆」を何よりも大事にしていこうと思う。

